
不気味の国のアリス

mmo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不気味の国のアリス

【Zコード】

Z9926E

【作者名】

mm○

【あらすじ】

不気味な国の不条理な人たちと不思議なアリス。

アリスと氷の部屋

アリスは今日もおじさんのことの大好きでした。

もし、彼が料理上手でなければアリスも町の人と同じように軽蔑の眼差しと嘲笑を惜しみなく振りまいていたことでしょう。

ぶよぶよのお腹を揺らしピエロのような笑みを浮べながらゲイシーおじさんは、

アリスの前に本日のメインディッシュ、レアに焼き上げたラムチョップ差し出します。

天使の笑みをこぼす小さなアリス、

天使を見て満足感覚えるふとつちょピエロ。

「世界中の調味料の中で、何が一番だと思うかい？」

おじさんは大きな鼻をブクッと膨らましながらアリスに話しかけます。

「もウ～何度も言つてるじゃない」

アリスはピーマンを愛犬のフェラリアがガツついている口サに紛れ込ませます。

「何度も何度も言つているじゃないか」ゲイシーはその巨体を震わせて言いました「ピーマンは身体にいいんだから食べなきゃダメだよ。それで、調味料の話なんだが・・・」

「何度も何度も何度もウ～～～！アリスはピーマンが嫌いです！」

そしてラムチョップに添えてあつたピーマンを全部、フェラリアの口に押し込みました。

「それで調味料なんだけどね」ゲイシーはあきらめたようなピエロの顔をして話を続けます「これさえあればどんな食材でも美味しく食べられるんだよ」

「嫌です、アリスはピーマンが嫌いです！」

「答えはね・・・空腹さ、お腹が空けばどんな料理だつて美味しく食べられるんだよ。例えば3日間何も食べないでいて、そしてやつ

と食べれる一個のおにぎりのなんて最高だね

「フェル、骨あげる」愛犬に子羊の骨をあげながら、アリスの耳がピクリと動きました「・・・本当?」

「本当さ、何十倍、何千倍も美味しい感じられるんだよ

「がまんできるかな」アリスはフェラリアと同じように子羊の骨を舐めて考えました「3日なんて我慢できないです」チロチロと骨をしゃぶり「でも、どんな味なんだろう」はしたなくチュパチュパと音を立てよだれをたらします。

ヨウヤクノツテキタナ。

とゲイシーは舌なめずりの笑みを浮べました。

「なら、僕の地下室を貸してあげよう。其処に君を閉じ込めて鍵をかけてしまえば、どうあがいたって3日間は絶食さ」

「うーん・・・3日後の食べ物がピーマンなんて事はないですよね?」

小さかしいガキだな。

でも子供なんてものは甘いものを田の前に差し出せば素直になるものさ。

デザートのシャンパンジョラートでアリスを宥めます。

「大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫・・・」

小さな天使のアリスは、

ピヒロの冷えた地下室で過ごすことにしました。

一人つきりは淋しいので。

愛犬のフェラリアも一緒に断食生活です。

ここから出られたらどんな美味しいものが待っているんだろう。希望に胸を膨らませて、

アリスもフェラリアも口の中がよだれでいっぱいです。

夜、空腹で目を覚ましたアリスは。

周りに誰もいないことに気付きました。

フェラリアだけ、父さんも母さんもいません。

冷たいかべと冷たい天井と冷たい床だけ。

声を上げました。

誰の耳にも入りません。

陽気に歌つてみました。

お調子者のピエロは扉を開けません。

淋しくて涙を流しました。

そんな事は誰も知ることはできないのです。

時間がたちました、時が流れました。

でもアリスにはよくわかりません。

暗い氷の地下室でうなだれたまま、

暖かい愛犬を抱きしめて扉が開くのを待ちます。

何日経つたんだろう。

何十日経つたんだろう。

おじさん、アリスの事忘れちゃったのかな。

でもみなさん心配しないで下さい。

アリスはまだまだ元気です。

フェルも一緒だからお腹が空いたって大丈夫です。

フェルが一緒だからお腹が空いたって大丈夫です。

外から階段を下りるリズムに乗った足音が聞えます。
陽気な声が聞えます。

ピエロの鳴き声です。

あの子はどんな顔をするだろうか。

あの子はどんな反応を示すだろう。

僕は、僕は、そういう事を想像するが好きなんだ。

ピエロは不気味に顔を歪ませながら、冷蔵庫の扉を開きます。

とたんに、

一陣の風のようす供が飛び出しました。

「ゴハン、ゴハン、ゴハン、ゴハン、ゴハン、ゴハン・・・

地下通路を駆け上がり、食卓へ、そして・・・

「ギャー！――！」

悲鳴。

どうした事がと、ゲイシーおじさんが食卓へ行つてみると、其処には残つた生命力を使い果たした絶食少女の姿。

「やつぱりピーマンだあ～！ 全部ピーマンだあああ～！ 大嘘つきにいい～！」

「ふふん」

「アリスはピーマンが嫌いです！」

「でもここにはもうピーマンしか食べ物はないんだ、食べないと死んじゃうぞ」

「アリスはピーマンが嫌いです！ ブロッコリーも嫌いです！ 一ンジンも嫌いです！ おじさんなんか大ッ嫌いです！」

そして渋々、ピーマンを食べ始めました。

苦ピーマンを噛み潰したような顔で。

「どうだ？ 空腹だから美味しいだろう

「まじゅい」

ふて腐れた天使の顔を見ながら、ピエロは笑いました。しかしそくに笑いを止め不思議なことに気が付きます。

「アリス・・・服はどうした？」

よく見ると、アリスは服を着ていません。

「それにフエラリアはどうしたんだ？」

「どちらもまじゅい」

心配になつたゲイシーはもう一度地下室の扉を開けました。
フェラリアは死んでいました。

アリスの服を喉に詰め込んで

ゲイシーはアリスに問いかけます。

「フェラリアが死んでいるぞ」

「うん」

空腹だからつてまじゅいもんはまじゅいです。

「いつたい何があつたんだアリス？」

「あのね、フェルがお腹が空いて苦しそうだったから、私の服をあげたんです」

「どういうことだ？」

「あのね、フェルがねお腹が空いて我慢できなくなつて、アリスを食べようとするの、だから私の臭いがついたお洋服を先にあげたんです」

「本當か？」

「あのね、フェルが言つたんだ「僕はこのままだとアリスを食べてしまつかもしれない」って。それで自分の頭を壁に向つてガンガン叩き始めたんだ、かわいそそうだから私のお洋服をあげたの、これを噛んでいれば少しは気がまぎれるかもと思つて」

「本当に本當か？」

「うん」

アリスは天使の笑顔を放ちました。

ピエロは釣られて笑つてしましました。

天使もピエロも笑顔がよく似合います。

アリスとセツシリ詰まつた卵

アリスには大切なお友達がいます。

リナ・メティアといふ名前の可愛らしい女の子で、外見だけなら町一番の美少女と言われてもおかしくないのですが、ただ、とても口が悪かったです。

それでいて度胸も無く心が弱かったのですから、相手が傷ついたび、日毎日毎に顔に暗い影を落とし、友達のアリスに泣きつくるのです。

リナはアリスの胸に顔をうずめながら罵詈雑言を小さな口から放ちます。

「てめえ、このお」アリスはリナの頭を撫でました。「ちくしょう、死んぢまえッ！」アリスはリナの背中をどんどんと叩きます。「ふつざけんじやねえよ！」アリスはリナの涙をキレイに丁寧に舐めとります。「クソッ・・・バーロー・・・」

ゆえにリナにはアリスしか友達はいません。

アリスは言いました。

「口をきくからいけないんです」

「んだと口ラツ！」

とてもいい考えだと思ったリナは口をふさぐことにしました。

道具はリナの髪の毛、とても長い黒髪をしていたので便利でした。束ねて編んでヒモにして、アリスはリナの口を縫い付けます。お裁縫が得意なアリスはコの字どじに縫い付けました。

見た目で糸が露出しない縫い方です。

リナちゃんのきれいな顔を汚さないように、丁寧に丁寧に・・・。

「どうです？」

「グルア！」

とても喜んだリナはアリスと抱き合いました。

キラキラと輝いた笑顔で町へと飛び出します。

しかし、今までの彼女の行動のせいからでしょうか。人々はリナの事を奇異の目で見詰めます。

少女はとても心が弱かつたので。

今度は髪の毛で目をふさぎました。

でも、

口を閉じても、目を閉じても。

世界はなくなることはないのです。

鼻を閉じても、耳を閉じても。

君の世界はなくならない。

指の間を縫いつけました。

足の間も閉じました。

体中の穴と言う穴、隙間と言う隙間を閉じました。

それでも世界はなくならない。

終わらない世界が君のそばにいつもりいます。

「でもね、アリスは解りませんです。リナちゃんはどうやって血分を縫つたんだろう」「

アリスはホットミルクの薄い皮膜を愛犬の餌箱へ入れました。

愛犬フェラリアは威風堂々たる剥製の姿となっています。

「で、その後リナちゃんはどうなったんだい？」

ゲイシーおじさんはコーヒーを片手に尋ねます。

「リナちゃんの体、隙間無く何処もかしこもべたに縫つてあって・・・

・卵です、真ん丸の卵なんです。えっとね・・・こんな形をしてて

アリスは体育座りをして見せました「ぴちぢみ真ん丸つるつるのこーるこーる」アリスはそのままの格好で口口口と転がって見せまし

た「本当に隙間が無いんだ。リナちゃんお肌白いから本当に卵みたいなんです。面白いからペンでリナちゃんの似顔絵を書いてあげたんです。真ん丸卵に大きなお顔・・・でもどっちが頭でどっちが尻だかアリスには解りませんです」

「ハハハハ、それじゃあハンプティ・ダンプティだね」

「アリスはそんなものは知りませんです」

「・・・近頃のガキは「でだ、リナちゃんは今どうしているんだい？」

「知らないです」

ホットミルクを飲み終えた彼女は、
フェルの剥製を蹴飛ばして外へ出て行きました。

ゲイシーおじさんの家の近くにある小さな森。
そこに大きな卵が隠されていました。

アリスは毎日森に出掛けでは、

卵を大事に温めています。

どんな生き物が生まれてくるかいつも楽しみにしていました。
鳥だつたらいいな、大きな七色の翼が生えてアリスと一緒に大空
で散歩するんだ。

でも、ヘビとかトカゲだつたらどうしよう・・・

ワニだつたら怖いよね。

アツそうだ、虫も卵から生まれるんだつけ。
うーん。

気になるなあ。

気になるなあ。

気になるなあ。

そうだ、中身を確かめてみればいいんですね。

よし。

せーのッ！

その日の夕食はオムレツでした。
アリスは三回お代わりしました。

時々目を瞑つては七色の翼を持つ大きな鳥背に乗つて、
大空を自由に飛び回る世界を想像します。

大空はどんどん広がって、

世界はどんどん大きくなつて。

でも、ふとある疑問が頭によぎります。
リナちゃんはどうやって自分を縫えたんだろう?
お裁縫下手なのにね。

アリスは知りませんです。

アリスと空ろな音楽祭

アリスはにはとつてもとつても好きな人がいます。
相手がどう思つているかは知りませんが、今日その好きな人とデートです。

お母さんの化粧台を借りて顔を真っ白に塗りつけて、
ちょっと暗めで儂そうな色を出すため目の周りに緑色のアイシャドー。

緑色のチーク、緑色の口紅、緑はアリスのシンボルカラー。
クローゼットからウサギをたんまり使った毛皮のワンピース。
帽子掛けからウサギの耳を使用した可愛らしいウサミミ帽子。
大人っぽさを演出するためにアクセサリーは一点のみ、ドードー鳥
を模した指輪。

これで完璧。

呼び鈴が鳴ると同時に、小さなアリスは新しい靴を履いて外へと飛び出しました。

そして期待していた相手の第一声が、

「似合わないな」

扉を閉め施錠。

ウサミミ帽子は宙を舞い、
ワンピースは床に叩きつけられ、踏まれ、切り刻まれ、
指輪は大切に丁寧に慎重に宝石箱へ収納。

顔が擦り切れるぐらいゴシゴシと洗顔をし、

ほんの少し、ほんの少しオシャレでリボンをぐるぐる巻きつけて、
これで鉄壁。

ベタ靴を履いて外へと飛び出した！

「服ぐらいい着るよ」

ぎやあ。

今日は街の公民館で音楽祭鑑賞です。

「顔から血が出てるぞ」

「ん？ お化粧が中々落ちないから、引っ搔いたんです。ガリガリつて」

「ならいいか

人間の血は特に珍しいものではないので、二人は目的地に向け歩き出しました。

アリスのお相手、

彼の名前はアルバート・フィッシュュと言いまして。

アリスより三つか四つ年上であり、身長も頭一つ分大きく、どう見ても兄と妹と言つたところでしょう。

アリスは彼の腕を引っ張り、無理やり腕組みをしました。

アルバートは無表情。

アリスは彼の二の腕に顔を寄せ、彼の夜服に顔をこすり付けます。彼女の血だらけの顔はすっかりきれいになりました。

アリスはご機嫌ニッコニコ

アルバートは無表情。

さて会場についたお二人さん。

演目はクラシックですがアリスはロックのよつにはしゃいでいます。

アルバートは唇に人差し指を当て、

「シツ」

アリスは人差し指越しにアルバートの唇にキスをしました。

アルバートは無表情。

そのまま人差し指をアリスの口の中に押し込み黙らせます。

演奏は始まり、

アルバートはその音色に身体をゆだねます。

まったくもつて音楽に無関心なアリスは、
関心のあるアルバートの顔を見続けていました。
でも五分も見続けていれば飽きます、

アルバートはそんな顔形をしているのです。

「アルちゃん、アルちゃん」

暇なので、とつても暇なのでアリスはアルバートに話しかけました。

「シツ」

アルバートは人差し指をアリスの方に向けました。

これ以上騒いだらまた突っ込んでやるぞ、いいかげん黙つてろ。

アリスは向けられた人差し指を口に含みました。

いい覚悟だ。

しかし、人差し指はアリスの喉奥に届きません、

アリスがしつかりと歯でかみ締めているからです。

「アルひゃん、アルひゃん」

「なんだ」

アルバートは無表情。

口内の攻防戦に彼は負け、指をアリスから引き抜きます。

「アルちゃんは音楽好きなんですか？」

「好きだよ」

アルバートは無用な問答を受け流しながら、自分の指を見ました。

彼の人差し指は、よだれ、歯型、そして滲み出た血が付いています。

それを自然な動きで口に含んでしまったアルバート。

アリスは「キヤッ」と、うれし恥かしい悲鳴を上げます。

アルバートは無表情。

自分の血を冷静に吸い取ります。

指揮者がとても面白い動きをしている。

狂ったように、ハチャメチャで、奇想天外で。

「どんな所が好きなんですか？」

「そうだな・・・」

バイオリンの音。

「音が、人間が壊れていく音に似ているから・・・」「じゃあ、あれはどんな風に聞えるんですか？」

アリスはコントラバスを指差した。

「よく見ろ、楽器が人の体に見えるだろ？」のつるがノゴギリで緩急を付けて肉を切断していくんだ。そこでだ、私が聞えている音というのは切り刻まれていく人間の叫び声じゃない、恐怖に歪んだ音色ではないんだよ。口ちゃんと塞いで暴れるようであれば首なんか切り落としたって構わない、生きていなくたつて構わない。解体時に発生する音が大事だ、骨と肉がノゴギリ歯の間に食い込んでいく音だよ。言うなれば作業音だ・・・わかるか？」

アルバートは無表情。

指から出た血を自分の唇に塗りたくる。

「あれは？」

「クラリネットは液体が流れる音だ、身体に穴を空けて血が流れ落ちる音を静かに静聴する。透き通った血の音だ」

「じゃあ、あれは？」

「釘を打ち付けた板でケツを叩く音だ」

「じゃあね・・・じゃあね・・・あれは？」

「あれはどう聞いてもタイプライターの音だ」

アルバートは無表情。

アリスは目をキラキラと輝かして彼を見詰めています。

「私は・・・私は・・・好きなんだ・・・誰にも理解されないが好きなんだ音楽が・・・音が・・・どんな音でも聞えるんだよ・・・」
アルバートは立ち上がり指揮者のように振る舞い始めました「壊れていく音だ、きしむ音だ、千切れる音だ、流れ出す音だ、折れいく音だ、碎けていく音だ、破壊の音楽だ！ 道具を使い人間を解体していく、時には素手だつて構わない。ああ・・・クラシックが聞

える、無機質な作業音が私の耳に聞えてくる。人を壊すイメージを
私に「『えてくれる！ 音楽は破壊だ！』

パチパチパチパチ・・・

たつた一人為のたつた一人の拍手。

彼の演奏はひとまず終わりを告げました。

【出入り禁止】

次の日。

アリスはいつものようにおじさんの家に出かけていきました。
袋一杯のお土産をゲイシーおじさんに手渡します。

「なんだいコリヤ？」

「アルちゃんがお土産でくれたんです。一足歩行羊の足肉だって」

「一足歩行？ 何だソリヤ」

「アリスは思うに、前足の代わりに手があるんじゃないかなって思
うんですけど」

「まあ、なんにせよ羊の肉だ。僕がうまく調理してやる・・・アリ
スも食べていくだろ？」

「つづん、いらないです」

ピトロは大きなお腹を震わせてビックリしました。

嫌いな食べ物以外、アリスが食事を断るなんて・・・

「そんなに不味いのかこの肉は」

「知らない、アリスは今ダイエットしてるんです」

「ンフフ」

ピエロは鼻で笑いました。

これだからこの人は嫌われるんです。

「昨日ねアルちゃんに裸見られたんですね」アリスは元愛犬の剥製を掴みました「でね、服を着る何て言われたんですね」犬の毛をブチブチを引き抜き「だからね服なんか着なくたってキレイだよなんて言われたいんですね」犬の置物は骨と皮だけになりました「だから、美容、健康、ダイエット」

近頃のガキはませやがる。

ゲイシーおじさんは鼻で笑いながら料理を始めました。

そんな事は一日も持たないだろうと知っているからです。

ク〜

アリスと森の中のHド

「黒手組の人達に追われてるんです、おじさん匿つて…」

「おう、この間のお土産ありがと。一足歩行羊の足肉あれはもつ・・・つまいと言つより懐かしい味だつた。

昔な、友達と三人で山登りに行つたことがあるだよ（その頃はスリムな身体だつたんだ）で、運悪く遭難してな、食料も少なくてみんなお腹を空かしていたんだ。その時に友人の一人が羊を捕まえてきたんだよ。朦朧とした意識の中で俺もよく料理できたと思うよ・・・で、その味がアリスが持つってきたお肉とよく似ていたんだなーこれが・・・うん。

もちろん、その肉のおかげで数日間持ちこたえてようやく友達と二人、救助されたつてわけだ。懐かしい味だ・・・思い出の味だ・・・ああ、逃げるんだつたらそここの裏口の扉からこいつそり逃げていきな

「ありがとうおじさん」

「ンフフ、そうだ。護身用の拳銃を貸してやるう、えへ・・・『デリンジャー』にスイス・ミニガンにコイルガン・・・どれがいい?」

「これです」

「リベレーターだな、それな六連発式に改造してあるから。しっかりと生き抜けよ!」

「うん」

アリスは森でよく遊びます。

おじさんの家の裏手にある小さな森は、元は木々生い茂る広大なものだったのでですが、

「広すぎると迷つたりしてしまつです」と言つことで、半分以上は焼き払われ、小さな小さな森となりました。

さて。

アリスが森の中を歩いていると、目の前に突然、黒マントにシルクハット姿の「デカブツ」が現れました。

「お嬢ちゃんお嬢ちゃん」

「なんですか？」

「この赤い手袋はお嬢ちゃんのかい？」

「そんな色、アリスのシンボルカラーじゃないです。それに中身が入っているじゃないですか」

残念そうな顔をした「デカブツ」を尻目に、アリスは散歩を続けました。

アリスが森の中を優雅に歩いていると、

また、あの「デカブツ」が「アキヤキヤキヤキヤ」と奇声を発しながら現れました。

「お嬢ちゃんお嬢ちゃん」

「なんですか？」

「この赤いセーターはお嬢ちゃんのかい？」

「アリスのじゃありませんです。それも中身が入ってます！」

「・・・そりゃかい」

アリスは「ウキヤキヤキヤキヤ」と奇声を発しながら散歩を続けます。

アリスが森の中で可憐に飛び跳ねていると、またしてもあの「デカブツ」が大おきな荷物を持って現れました。

「お嬢ちゃんお嬢ちゃん」

「名前はアリスです」

「失礼お嬢ちゃん、私はエドと申します」

「ブー」

「ちょっと色々持つてきただから見てくれるかな、赤い帽子、赤いズボン、赤い靴、赤いデスマスク……」の中でお嬢ちゃんのはいつたいどれなのか？」

「全部中身付です！ そうです、中身を全部つなぎ合わせてみればいいんです。そつすればおじさんの探している人が見つかりますです」

「おお、それはいいアイディアだ。しかしおじさんとは失礼だな。こう見えても私は……」

「じゃ、じじい」

「なんだと！」

「エドジジ」とエロジジにはよく似ています

怒ったエドジジからアリスは逃げました。

スタコラサツサツサーのーサー
スタコラサツサツサーのーサー

アリスは森の中にあるお氣に入りのお花畠で走り回っていると、またしてもエドジジがぬつそり現れました。

「お嬢ちゃんお嬢ちゃん」

「アリス」

「いやあ、お嬢ちゃんのアイディアで中身を全部つなぎ合わせてみたんだ。大きかつたり小さかつたり色がちがつたりして歪だけれど・・・見るかい？」

「嫌」

「そう・・・でも、これはお嬢ちゃんのだよねえ・・・」

エドジジはアリスの田の前で手のひらを開けて見せました。大きな手の真ん中に小さな銃が乗つかっていました。

「あつ！」

アリスは体中を調べてみましたが、おじさんから借りたりベレタ
ーは見つかりません。

「そうかい、やつぱりこの赤い銃はお嬢ちゃんのだつたんだね」「
赤くないです」

「いや、赤い銃だよ」

「返してくださいです」

「赤い銃だ」

「赤くない！」

「これからお嬢ちゃんの血で赤くなるのぞ！」

エドジジィはマントの裾から大おきな力マを振り上げました。
一閃。

血が噴出しやすいようにアリスの衣服が切り刻まれます。

「アキヤ キヤ キヤ キヤ」

高笑いをするエドジジィ、しかしそんな事ではアリスは怯みません。

「おじさんの銃を返してくださいです！」

「おじさんんの？」

「うん」

「お嬢ちゃんのじゃなくて？」

「アリス！」

「・・・おじさんの家は何処にあるんだい？」

「この先をずっと行ったところです」

「そうかい、なら私からおじさんにこの銃を返してあげよう
デカブツのエドジジィは去つていきました。

切り刻まれた衣服、

踏み荒らされたお花畠、

奪われた大切なものの。

『...セカンド...』、『...クイズ...』

アリスと秘密の隠れ家

アリスは秘密の隠れ家を作りました。
小さな森の中にある小さな家です。

今日は友達の、ううん、恋人の・・・片思い人をご招待しました。
アリスはご機嫌に飾り付けをします。

緑一色の装飾品、緑はアリスのシンボルカラーです。
小唄を歌いながら作業を続いていると、

カラランカラランとベルの音。

アリスは猛ダッシュで玄関へ、

飛びつき腹部に強烈な一撃を食らわせながら出迎えます。
それでも、

大打撃を食らいながらも。

アルバートは無表情。

「ここは誰の家だ？」

アルバートは緑色の飲み物をすすりながら尋ねます。

「ここはアリスの・・・アリスとアルちゃんの秘密基地です」

アリスはアルバートが持ってきた緑色のケーキをついぱみながらうれしそうに答えます。

「ふうん、で、元の持ち主は？」

「おじさんの・・・それでもこの家はアリスのなんです」

「ふうん、で、おじさんは？」

「地下室です・・・それでもここはアリスの秘密基地なんです」

「ふうん、で、その地下室つてのは？」

「カギをかけたから中の様子なんて知りません・・・それでもここはアリスとアルちゃんの秘密基地なんです！ 愛の巣です！ 秘密の楽園です！ 鉄の処女です！」

「何を言つているんだ?」

アリスはテーブルの上で踊りだしました。
小さなステップを軽やかに踏み、
まるで妖精のようなダンスです。

アルバートは無表情でしたが、

彼女の為に鼻歌を歌い、手でリズムを取つてくれました。
アリスはとても幸せそうに舞っています。

とんつ・・・とアリスは跳ね上がり。

落下。

そのままアルバートの腕の中へ。

強制的なお姫様抱っこ。

アリスの幸せは絶頂を迎えました。

それでもアルバートは・・・

「どうして、おじさんが地下室に閉じ込められているんだ?」

ロマンのかけらもありはしません。

「ここの前ね、黒手組に追われたんです・・・」アリスは腕の中で話
し出しました「ほら、町にある意地悪な少年グループの・・・アリ
スねとても怖かつたんだから」アリスは猫なで声を発しましたがア
ルバートには効きません「ブ・・・それでね、一旦おじさんの家
に逃げ込んで、おじさんが黒手組の相手をしている間に森へ逃げた
んです、でもね森でも変なエロジジーに襲われそうに成ったんです・
・・アリスねとってもとつとつつても怖かつたんだからあ・・・」
アルバートには効きません「ブ・・! いいもん・・・そのエロジジ
い、何故かおじさんの家に向つたんです、アリスも後を追つたの。
それでは、黒手組の人達はどうやらおじさんが追つ払つたみたい
なんですけど、今度はエロジジーとケンカを始めちゃつたんです。」

アリスはモノ欲しそうな表情を浮かべますか。
アルバートはただ。

「ふうん、なんだあ？」

と、興味を失い、そのままアリスを床に落としました。

「いつたあ～いです～」

ブー！ ブー！ ブー！

それでも秘密基地は秘密基地。

誰にもいえない秘密基地。

地下室からガタガタ音が聞えても。

誰も知らない秘密基地。

いくら泣き叫んでも。

何も聞えない秘密基地。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9926e/>

不気味の国のアリス

2010年10月28日07時08分発行